

安楽寺だより

第30号

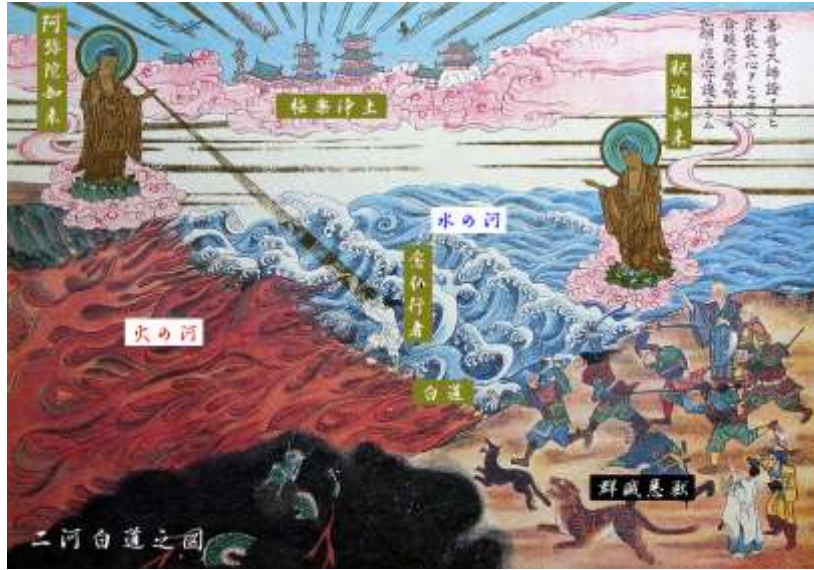
紙面内容

- 2面 福島の子供たちと過ごす 若院
- 3面 東本願寺報恩講・延暦寺に参拝
- 4面 日本仏教史⑬ 明治時代(下)

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

今年も二河白道のおはなしを続けます

明けましておめでとうございます



「人生を問いを持って生きる」

二河白道のたとえその④ 人生の方向転換

善導大師の説かれた『二河白道のたとえ』は、白道をあゆみを始めた念仏の行者のうえに展開されるおはなしに入りま

す。『この人』とは、「健康で長生きが一番死んでしまつてはおしまい・・・」と、今まで自分で答えを出してきた人生だった人が、念仏の教えに出遇い、人間としての生き方にはじめて問いを持った人のことをあらわします。

『群賊悪獣ありて』とは、『この人』から道を求めるところを奪おうとすることのたとえの言葉です。世間の考え(固定観念)に疑問を持ち、人生を問いを持って生きようとする『この人』に、『群賊悪獣』は、世間の常識や価値観という大きな力で道を求めるところを捨て去るよう迫ってくることをあらわします。

人生に起きてくる様々な苦悩の原因を問い尋ねることをせず、人間として生まれ・生きてきた意義を深く考えないと言うような思考停止のままの人生を過ごしてきた人が、仏道に出遇って「問いを持った人生」があることに気付く(2面に続く)

問いを持った人生とは、「人生とはこんなもの」と勝手に答えを出していた人が、業縁による苦しみや悩みを体験し、「苦悩の起る根本原因は、どこにあるのか」との問いを持って生きる人に方向転換した人生を指します。

つまり、私のこれまでの生きざまや私の過ぎしている社会のありように、問いを持ってあゆむのが『この人』であり、教えを求め、教えを尋ねていくあゆみを始めます。

この人すでに空曠のはるかなる処に至るに、さらに人物なし。多くの群賊悪獣ありて、この人を単独なるを見て、競い来たりて、この人を殺さんと欲す。死を怖れて、直ちに走りて西に向かう。・

「震災の記憶を心に刻む」

-福島の子供たちと過ごす-



子供たちとのゲームの様子

二〇一一年三月十一日、東日本大震災が起こつて、もうすぐ七年になります。少しづつ復興していく中ニュースでもあまり報道されなくなつた今、人々からの記憶も薄れていつているような気がしてなりません。でも、まだまだ原発の問題など、解決どころか増えているような現状がみられます。

震災が起こつた翌年から「福島と名古屋を結ぶ子ども会」が始まりましたので、今年で六回目になります。十二月二十三〜二十七日の間、子供たちを含め五十人を超える皆様福島から来てもらえました。外でなかなか遊ばせてやれない親御さん、遊びたくても外へ行けない子供たち、その不安を名古屋に来て思いつき遊んでもらうことで発散してもらえたという趣旨で、今年も行いました。

その期間の中、私が所属している仏教青年

(1面より)て、あゆみ始めると『群賊悪獣』は道を求めるところを奪い、捨て去るように押し寄せてくるのが『競い来たりて、この人を殺さんと欲す』との意味なのです。

例えば、身の上に不幸なことが続くと、占いなどで見てもらうとの「迷いのところ」が起きることもこのことではないでしょうか。

迷信的なもの・仏法以外の様々な思想にとら

われる人には、仏教の「正信」の教えや「念仏」するところは起きてきません。

私たちは、『群賊悪獣』は外からの力だと思つてしまいます。周りから自分自身に襲いかかつてくると考えてしまいます。

『群賊悪獣、詐(いつわり)親(した)しむ』とは人間の『六根・六識・六塵・五陰・四大に例えられる』と善導大師は申されます。つまり

私たちの身心・環境が『群賊悪獣』なのです。身心は心地よさをよしとします。「健康・名誉・地位・お金があれば最高」との誘惑に虜になつて、私が問うべきことを問わないままに済ましてしまいます。

つまり、『群賊悪獣』は、外からの力・周りから襲いかかってくるのではなく、実は私たち自身のうちにあつたのです。

協議会で、二十五日のお昼から福島の子供たちと一緒にいろいろな遊びをしようとして企画させていただきました。名古屋東別院内のお東幼稚園をお借りして、宝探しゲームや真宗かるた、ロックバランシングなど名古屋教区児童教化連盟の方のお力添えもあつて、半日でしたがとても楽しく過ごさせていただきました。宝探しで園庭を走り回る子供たち、丸い石を集中して積み上げる子、かるたでなかなか取れずに泣いてしまう子もいて、とても子供らしい姿を見させてもらった気がします。

震災の記憶が日々薄れていく中でも、縁あることを大切にしていき、毎年このように行われることで、東北の人々との関係をより時間が深めているのではないかと感じました。共に一歩一歩んでいくことを改めて自分自身の心に刻むきっかけを与えていただけたと思えました。

若院記

本山東本願寺報恩講に参拝

堂内に響き渡る御堂衆のお勤め

昨年十一月二十六日、安楽寺ご門徒四十五名の皆様とともに、本山東本願寺御正忌報恩講に参拝いたしました。十一月最後の日曜日でしたが、京都市内は大した混雑もなく、予定どおり真宗本廟に到着できました。

御影堂前の白州に於いて、記念の写真撮影をした後、御影堂の親鸞聖人の御真影の正面に座つてもまもなく、お勤めが始まりました。御堂衆の響き渡るお勤めの中、ご連枝が登高座で「歎徳文」(聖人のご生涯を綴った御聖教)を拝読されました。真宗本廟における「報恩謝徳の法要」に出会えた喜びの参拝でした。

京都駅前のハトヤホテルで昼食をした後、比叡山延暦寺にバスで移動しました。延暦寺は、伝教大師・最澄が、平安時代初期に開かれた寺で、天台宗の総本山です。山麓に多くの御堂がございいますが、その中でも根本中堂の荘厳さは、千三百年に及ぶ歴史を感じさせられます。

あいにく根本中堂は現在御修復中で、工所用素屋根に覆われていましたが、薄暗い御堂の中を一回りして静かに参拝いたしました。

今回の団体参拝に参加されましたご門徒等の皆様のご協力をいただき、無事参拝できましたこと感謝申し上げます。来年の報恩講も、ぜひご予定下さいますよう、宜しくお願ひ致します。



本山御影堂前で参拝記念写真

帰敬式を行いました



昨年の報恩講には、多数のご門徒の皆様にご参詣をいただき誠にありがとうございました。十二日の午後には帰敬式を執行了しました。今回は四名のご門徒の皆様にご受式していただきました。

全員で「三帰依文」(仏・法・僧の三宝に帰依するお言葉)を唱和した後、剃刀(おかみそり)の式を行ない、お一人づつに法名を伝達しました。受式者を代表して浅井さんから「誓いのことば」をいただき、全員で正信偈をお勤めして式を終えました。

来年も執り行う予定ですので、ご希望される皆様はお申し出ください。

仏教豆知識

第三十回



日本の仏教

歴史 その⑬

明治時代(下)

明治政府と東本願寺との関わりは、北海道開拓（先号参照）ともう一つは海外布教です。

明治初期に中国へ布教に渡った小栗栖香頂は、上海・北京などで仏教事情を視察し、インド・中国・日本が仏教によって連帯し、キリスト教の布教に対抗しようと主張しました。当時、東本願寺寺務所長の石川舜台は、明治政府要人に接近して、近代国家建設を目指す日本にとって真宗が有用なことを説きました。

政府は、明治九年（一八七六年）日朝修好条規を強引に締結させました。大谷派宗門の命を受けた奥村円心は、明治十一年（一八七八年）釜山に東本願寺の別院を開設しました。宗門による海外布教は、明治政府

の対外政策に同調し、教団がすすんで国家の役に立つことを示そうとしました。

宗門の海外布教は仏教に基づく「アジア民族の連帯」を唱えながら、朝鮮・中国を侵略して、日本の権益を獲得しようとする政府の対外政策に組み込まれていきました。

明治四十三年（一九一〇年）朝鮮併合以後、朝鮮にある別院本堂に「天牌」を安置し、植民地化した人民に対して「忠良の臣民たらしめんこと」と、天皇の権威を強調することを布教のかなめとし、政府の軍事支配と権益確保に宗門が支援することになっていきました。



昨年の海外ニュースは、アメリカ・北朝鮮に関する記事が多く、戦争の不安が増しました。しかし、中日新聞掲載の海外十大ニュース三番目は、「ICAN平和賞」でした。▼

国連で七月に採択された「核兵器禁止条約」は、ひとつの光を世界中に届けてくれました。条約採択に至るまでに「核兵器廃絶国際キャンペーン」(ICAN)が、十年にわたって世界各地で努力された画期的な成果とします。▼十二月の受賞演説でサーロー節子さんが、自らの被爆体験を述べたあと、「核兵器は必要悪ではありません。絶対悪なので」「大量虐殺につながるという現実をみれば、『核抑止力』とは、軍縮を抑止するものということは明らかです」「核の恐怖という暗い夜から抜け出し、かけがえのない世界を存続させるために情熱を傾けることを誓います」と訴えました。▼いわゆる「核の傘」の下にいる日本人に私たちが「人間と核兵器は共存できない」との声をあげること、日本が核兵器禁止条約締結に取り組むことを訴えることが、広島・長崎で無念の死を遂げた方々、被爆者(ひばくしゃ)の人々に向き合う日本人としてのあるべき生き方と思えます。